



体験×感動=感性“新しい価値の発見”

旅において、地域文化へのこだわりが語られたとき、訪れる人の心に共感・共鳴が生まれます。そのとき、地域文化のにおいを胸いっぱい吸いこみ、新しい自分を発見し、その感動が未来に生き続けます。それだけに、修学旅行のデザインを大切にしましょう。



ワクワク・ドキドキ心ときめかす修学旅行!

感性をはぐくむ 修学旅行



感性は、人間らしく生きていくためになくてはならない心の作用です。真・善・美(情緒価値)を心に感じて、それを表出することのできる力ともいえましょう。今、「もの」の時代から「心」の時代に移っていくとき、最終的に、ものの価値基準を決めるのが「感性」です。「心に響く」という価値がどうしても求められる時代といえましょう。



教育はまさにこの課題に直面しています。学習時間をいくらかけても、学習内容の吟味が薄れ、形骸化した学習の展開では、本当の知性は育ちません。教育には、教師と子供の感性のコミュニケーションが重要です。

日本感性教育学会では、数学の授業での学習を通じて体験できる「ときめき」として、3 - fuls (Joyful, Wonderful, Beautiful) を提案しています。

生活者の感性に響き、感動・共感を与えるものづくりやサービスこそ、心を充足させ生活を豊かにさせるものです。そこで、**経済産業省**では、「感性」を機能性・信頼性・価格を超える第四の価値軸として提案しています。

したがって、教育の価値基準にも、「子供の感性に働きかけ、感動や共感が顕在化する価値基準」(**感性価値**)を加えることが重要であると考えています。

特に、「修学旅行」という学校行事を捉えたとき、この感性価値を重視した活動(単なる体験でなく)が求められます。まさに、修学旅行は感性を磨く旅であるといえます。旅に出て、未知なる世界における文化・自然・人々との出会いは、生涯の人間形成に大きなインパクトを与えるものです。

すばらしい思い出を作る 修学旅行に

J T 生命誌研究館 館長

中村 桂子

感性を育むための出発点は体験です。自分の耳で聞き、眼で見、手で触って感じ、考えることです。次にその表現が大事です。友だちと語り合い、時には文に書き絵に描く。すると、感じる気持ちと同時にそれを人と共有する喜びが生まれます。こうして他を思いやる優しさと、人と共に生きていく気持ちとが養われるのです。

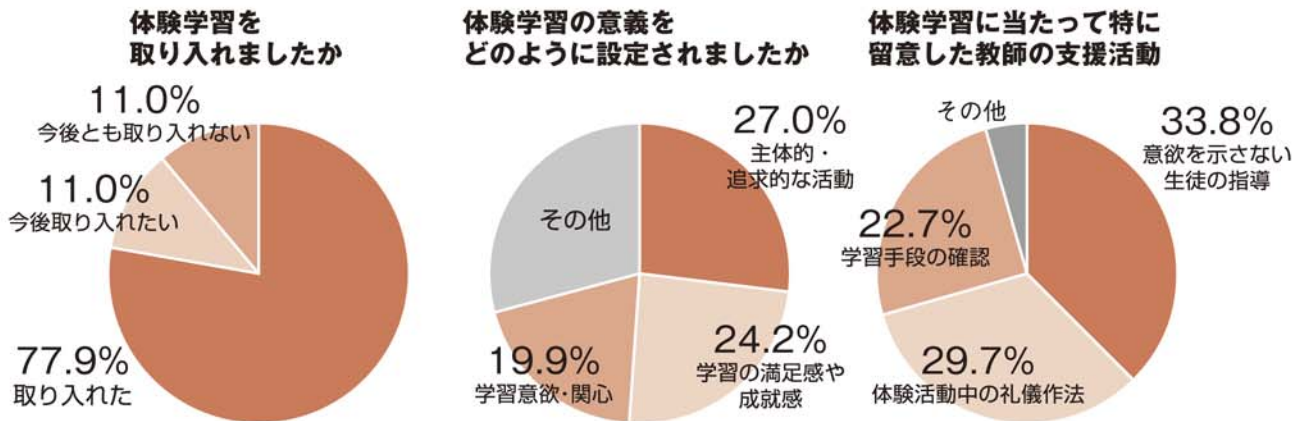
修学旅行は、これを具体化するよい機会です。感性をはぐくむことを意識した計画を皆で立てたら、すばらしい旅行になり、思い出として心に深く残ることでしょう。

このような感性を磨く旅の提案ができないかというのが
私どもの願いです

体験を感性に高める 修学旅行



現在、各学校で実施されている修学旅行では、**体験学習**が多く取り入れられています。私どもの調査では次のようになっています。(依頼数:全国中学校3147校、回答数:2660校、回答率:84.5%)



具体的な体験学習の内容分類は多岐にわたります。私どもは、分類項目を次のように設定しています。

A 歴史文化体験	A1 歴史文化遺産体験 A2 生活歴史文化体験	C 環境保全共生体験	C1 自然環境体験 C2 生活・社会環境体験 C3 地球環境体験
B 社会体験	B1 一般社会・職場体験 B2 福祉・ボランティア B3 平和学習 B4 国際社会体験 B5 進路選択体験 B6 生活文化体験	D 交流体験	D1 学校交流体験 D2 宿泊体験
		E 自然・スポーツ体験	E1 陸 E2 海・湖・川 E3 空

この**体験**とは、個々の子供が自らの手で、足で、頭で、心で捉え、感じられた経験が高められた姿です。歴史・文化・産業・自然等々の地域で育てられ伝えられてきた「もの」への感動が重要です。人が「もの」をつくるということは、思いやりや心配りが大切で、人の幸せのためになされる行為ですから、その「もの」を観る、触れる、感じることによって、そこに自分の姿や行動が投影され、自らの「心創り」が高められていくものです。そこに感性価値が生まれます。作り手の感性に由来するこだわりやスピリットが、来訪者の感性に、「もの語り」として訴えかけてくれます。その感性に心からの共感を覚えることによって、忘れ得ぬ思い出として深く心に刻み込まれるのです。

**体験を通して子供の心と行動を読み取り、
修学旅行という学習を感性という価値で綴ろうという考えです**

子供と創る修学旅行



修学旅行は学校行事として学校の大切なカリキュラムの一環です。ですから、集団宿泊的行事としての「平素と異なる環境で、集団行動を通して、人間的な触れ合いや社会性の育成」などの目的を達成しなければなりません。その意味から、修学旅行は「活用型の学習」の集大成ともいえましょう。

この点から考えますと、「旅」を成功させるためには、訪れる人の願いと地域の人々の願いとの一体化が必要です。訪問地で育てられてきた伝統・文化・歴史・感情を乱すものであってはなりません。訪問者のマナーはもちろんのこと、地域を理解し、地域の価値をしっかりと捉えることが重要です。あくまでも学ぶ姿勢に立って行動することによって、地域の持つすばらしさへの畏敬の念が生まれることでしょう。ここに、感性価値を求める新しい**観光交流空間**（その地の光を学び合う空間）が創出されます。

そのためには、「修学旅行の共感・共鳴・共創」が必要です。教師と子供、そして地域の人々や旅行に携わる人々が協働して創り上げることとなります。

価値を捉えるために重要な『共創プロジェクト』づくり



そのとき、教師と子供の心の中に共通の価値が生まれる

- ① **「伝達」** 修学旅行の価値を教師が子供たちに熱く語る = **意味訴求・感覚訴求**
- ② **「増幅」** いろいろな感性の組み合わせによって、互いの価値が増幅される = **わくわく・ドキドキ**
- ③ **「転換」** 見方・捉え方の変化によって、新たな価値が生まれる = **物語性を持った価値の創造**

修学旅行をデザインする

デザインとは = 姿・形・色彩等を描く「造形行為」とともに、考案する・意図すること。
デザイン力のイメージが、『お母さんのおにぎり』に譬えられています。

母親が子供のためにおにぎりを作るとき、大抵の場合材料は有り合わせである。しかし、子供の好みは熟知しているし、手の大きさ、口の大きさ、食べ方まですべてを知り尽くしている。そして、子供の食べている状況や喜ぶ顔を思い浮かべながら、硬すぎもせず柔らかすぎもせず、心をこめて握っている。

(デザイナー岩倉信弥氏)

こんな、『先生が子供たちと共に創り上げる
修学旅行という「おにぎり」』をデザインしませんか

感動のコースを組み立てる

「ものづくり」から「モノガタリ」へ



にぎり墨

テーマで綴る奈良文化への憧憬

◎筆と墨の文化をたどる

菅原天満宮 ⇄ 田中筆匠 ⇄ 興福寺 ⇄ 錦光園 ⇄ 奈良市杉岡華邨書道美術館

菅原道真の生誕の地であろうとされている菅原天満宮には、筆塚があります。筆の発明は、秦の時代に遡るのではないかと伝えられています。奈良筆の製法は、弘法大師の伝授といわれていますが、匠の技の高い品質へのこだわりと伝統を守るといふ心が受け継がれてきました。毎年3月に「筆まつり」が開催されます。書道の上達を祈り、書業の発展を願う祭典で、参拝者の一字書の競書が行われます。

その製法的一端を体験してから、興福寺を訪問します。奈良墨は、室町時代に興福寺二諦坊で作られたのが始まりとされています。胡麻油を燃やして煤(すす)を採り、膠(にかわ)を加えて油煙墨が作られています。

墨の製造所で自分だけの「にぎり墨」に挑戦したあと、筆と墨と和紙の総合された文化として、かな文字を中心とした杉岡華邨書道美術館で、感性豊かな作品を鑑賞します。

訪問地に心を残す

◎大地に地上絵を作る

修学旅行での航空機利用が可能になってきたとき、空から見える「花の地上絵」を作ろうという試みが進行しています。空港周辺にある牧場などで毎年少しずつ地上絵を広げていこうという思い出づくりです。国際化時代に新しいイメージづくりを展開します。

◎修学旅行の思い出を学校に

訪問地の苗木をいただいてきて、学校の校庭に植樹する。訪問地での植樹体験が発展して、自分たちの校庭に植樹することは、地域との交流の一端ともなり、思い出をつなげていくこととなっていきます。

旅、体験、感性

日本感性教育学会理事長

渡部 邦雄

旅はときめきから始まる。計画に胸がおどりと、未知への期待と不安が交錯する。ワクワク、ドキドキとはやる心をおさえつつ、旅に臨む。行く先々でのヒト、コト、モノとの思わぬ出会いに感動がはしる。想像と現実との交錯も面白い。旅先の多様な体験は、子供自らが五感を総動員して、対象に体全体でぶつかり、臨場感あふれる中を直接的、具体的な活動を通して何かを実感し、ものの見方や考え方、感じ方を豊かに発達させる機会や場となる。五感を通して価値あるものに感応する力、情緒価値を表出する力としての感性をはぐくむ。感動体験、社会体験などが子供の感性を磨き、知的好奇心を刺激する。知的好奇心は感性を揺さぶる。修学旅行はその相互作用の契機として、有効な教育機能を持っている。

修学旅行をデザインするためのお手伝い

ねらいに沿った修学旅行地の情報調査

学校としての修学旅行のねらいが設定されます。そのねらいに沿って候補地が設定されますが、その最初の情報として、修学旅行の行動を組み立てる素材を選択することになります。特に、感性価値をはぐくむ修学旅行を目指すために新しい視点からの探索が必要です。各地からの情報発信もなされていますが、私どもも、感性価値の視点から、それぞれの修学旅行地の地域情報を、『環境学習素材』として発信しています。（下記の当協会のホームページをご覧ください。）

プロジェクトを立ち上げる

校内組織として、教師と子供たちによって修学旅行実施プロジェクトが立ち上げられ、「総合的な学習の時間」などを利用した事前学習が行われていますが、このプロジェクトに、受け入れ地域の方々の派遣や、現地情報収集などのお手伝いをいたします。

具体的な修学旅行のデザインづくり

教育（学校）のニーズを捉え、その中で生きていく子どもの姿を描き、修学旅行における感性価値を高める素材を吟味します。

「どのような内容」をデザインしていくか目標を定めます。

『場』と『機会』を想定し、五感を通して質の高い感覚を重視した体験を組み立てます。

その内容の状況を分析して、その学校としての新しい修学旅行の姿を描いてみます。

各方面の方々の協力を得て、修学旅行をプラン化し、実践に移します。

必要に応じて実践の追跡調査など、成果の検証を行います。

**いま、モデル・実施校を募集しています
このような趣旨にご賛同いただけましたらご一報ください**

参考文献：小阪裕司著『「感性」のマーケティング』（PHP研究所）／経済産業省編「感性価値創造イニシアティブ」他

財団法人 全国修学旅行研究協会

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-6-8九段南ビル6F

TEL 03-5275-6651 / FAX 03-5275-6653 / URL <http://shugakuryoko.com/> / E-mail shuryo@h2.dion.ne.jp